

# 白金霞

四月号



平成26年4月発行 第38号

# 白金葭定例会会案内（＊は吟行句会）

＊五月三日（土） 10:20 上野文化会館楽屋口集合↓法隆寺展

観覧後句会（13:00～17:00 文化会館小会議室）

五月十六日（金） 12:00～15:00（アビスタ第三学習室）

兼題：武者人形、粽

六月二十日（金） 12:00～15:00（アビスタ第四学習室）

兼題：ハセリ、蚊帳

七月十八日（金） 12:00～15:00（アビスタ第四学習室）

兼題：半夏生、麴もち

## 武者人形、粽の参考句（5月16日分）

この国の未来をじつと鐘馗様  
刀折れしまま弟の武者人形  
武者兜朱の顎紐を長垂らす  
金扇に日輪真紅武者飾  
軀無き武者にて鎧兜着る  
乱好む太刀にはあらずと飾りけり  
飾りたる兜の緒こそ太かりき  
粽結う死後の長さを思いつつ  
粽結う蘭草一尋のはやわぎ  
粽解く夫が家出をしない訳  
粽結ふかた手にはさむ額髪  
賑に粽解くなり座敷中  
粽ほどく手もとは似たり経の紐  
粽解いて蘆吹く風の音聞かん

長島かず子  
栗原かつ代  
光成高志  
山口誓子  
阿波野青畝  
後藤夜半  
宇多喜代子  
澁谷道  
柳瀬亜湖  
松尾芭蕉  
路通  
北枝  
燕村

## 月例会会報（14／4／18 10名欠1 花曇、春の海）

飯田孝三

春の海とつぷり暮れぬ放哉忌

蝌蚪うかぶかつて墨東奇譚かな

掌に地球まろめて花一匂

徐に巨船入れたる灣の春

仲見世に人ら混みあふ花曇

増田陽一

「北回歸線」の頁春の蚊挟まれて

莖立ちの背丈ほど伸び荒畑

店倉たなぐらのギリシヤ人形花曇

石鹼玉洋上に出て後知らず

接骨木にわどの咲く下総に長居して

光成高志

春の海ひねもす磯を結へる波

甘茶仏天上指す手曲げ給ふ

花曇稲取岬家並哉

幅広く日脚の映る春の海

蝌蚪生まれ喜び水に浮び来る

花祭角の魚屋鯛を売る

兄を追ひ渚を駆ける春の浜

口を手で掩ひて笑ふ花曇

馬柵<sup>ませ</sup> 一つはづれてをりぬ山桜

洞門の吸ひ込む汐や春の海

昼の寄席はねて上野の花曇

春疾風雀とびこむ藪の中

表札のなき家に一本桜かな

春の海浜辺に拾ふ鳥の羽

花疲れことりと置いて耳飾り

波音の引くとき高く春の海

轉りや機を習ひし安房の里

花殻を夫と摘む庭養花天

光 みち

ひねもして佐渡横たはる春の海

アルデバラン目ざしし旅や春の夢

(アルデバランは牡牛座の首星)

浅草に連合ひはぐれ養花天

ぶちまけて泡のかぎりの春の潮

大津波の記憶蔵して春の海

替り合ふ春潮の大絵巻物

夏近き紺のうねりの潮目かな

青空につぶてのごとく初つばめ

満開の花の中から鳥の声

富士山は姿を見せず花曇

ねらいつけ貝を採す春の海

春の海足裏に砂のあたたかし

地図通り湾曲している春の海

むき出しのテトラポットや春の海

吉羽多美子

倉田紀子

松村幸一

浅野正美  
3

青木啓泰

ピーナツを口に放れば山笑う  
水差しを手許に置きぬ春の闇  
花の山たつた一組花囲み

武者昭七

波の寄る小島遙けし春の海（実朝讃仰）  
来し方や悔ひ多くあり養花天  
春の海アロエの列の向こう側（石廊崎）  
空昏れて漁火灯す春の海  
洋館のカーテンゆらり春の海

工藤宏子

五線譜に菜の花おどる娘の手紙  
都忘れを忘れじと呼び北に生く  
江戸棲で終のドレスを銀屏風  
定点に幾たび立つや春の海  
養花天供物ほほばる四姉妹

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 馬柵一つはづれてをりぬ山桜

みち

4	春の海とつぷり暮れぬ放哉忌	孝三
3	「北回帰線」の頁春の蚊挟まれて	陽一
3	昼の寄席はねて上野の花曇	多美子
3	石鹼玉洋上に出て後知らず	陽一
3	徐に巨船入れたる灣の春	孝三
3	兄を追ひ渚を駆ける春の浜	みち
3	花疲れことりと置いて耳飾り	多美子
3	波音の引くとき高く春の海	紀子
2	春の海足裏に砂のあたたかし	正美
2	大津波の記憶蔵して春の海	幸一
2	定点に幾たび立つや春の海	宏子
2	来し方や悔ひ多くあり養花天	昭七
2	ぶちまけて泡のかぎりの春の潮	〃
2	表札のなき家に一本桜かな	多美子
2	春の海アロエの列の向こう側（石廊崎）	昭七
2	夏近き紺のうねりの潮目かな	幸一
2	水差しを手許に置きぬ春の闇	啓泰
2	地図通り湾曲している春の海	〃
2	浅草に連合ひはぐれ養花天	幸一
2	アルデバラン目ざしし旅や春の夢	紀子
1	（アルデバランは牡牛座の首星）	
1	五線譜に菜の花おどる娘の手紙	宏子
1	茎立ちの背丈ほど伸び荒畑	陽一

1 1 蝌蚪うかぶかつて墨東奇譚かな

1 江戸棲で終のドレスや銀屏風

1 江戸棲で終のドレスを銀屏風

1 空昏れて漁火灯す春の海

1 洋館のカーテンゆらり春の海

1 ピーナツを口に放れば山笑う

1 口を手で掩ひて笑ふ花曇

1 掌に地球まろめて花一匁

1 花殻を夫と摘む庭養花天

1 店倉<sup>たぐら</sup>のギリシヤ人形花曇

1 春の海浜辺に拾ふ鳥の羽

1 仲見世に人ら混みあふ花曇

1 花祭角の魚屋鯛を売る

1 接骨木<sup>にわとこ</sup>の咲く下総に長居して

1 むき出しのテトラポットや春の海

1 養花天供物ほおぼる四姉妹

1 養花天供物ほほばる四姉妹

1 替り合ふ春潮の大絵巻物

1 波の寄る小島遙けし春の海 (実朝讃仰)

1 甘茶仏天上指す手曲げ給ふ

1 轉りや機を習ひし安房の里

1 ねらいつけ貝を採す春の海

1 花の山たつた一組花囲み

孝三 宏子

昭七

〃

啓泰

みち

孝三

紀子

陽一

多美子

孝三

みち

陽一

啓泰

宏子

幸一

昭七

高志

紀子

正美

啓泰

富士山は姿を見せず花曇  
花曇稲取岬家並哉

春の海ひねもす磯を結へる波

幅広く日脚の映る春の海

ひねもして佐渡横たはる春の海

満開の花の中から鳥の声

青空につぶてのごとく初つばめ

都忘れ忘れじと呼び北に生く

都忘れを忘れじと呼び北に生く

五線譜に菜の花おどる娘の手紙

洞門の吸ひ込む汐や春の海

蝌蚪生まれ喜び水に浮び来る

### 一句鑑賞

光成高志

### 掌に地球まろめて花一匁

孝三

「掌に地球まろめて」とはなんぞや。「花一匁」は桜の花が一匁であらうか。いや、「花一匁」というわらべ歌を指すのであろうか。とにかく訳のわからぬ句なので取った。作者すぐさまの弁、その日電車に乗ったら若者が皆スマホを掌でこちよこちよ触っている。ITも使えるスマートホン、日本はおろか外国とも交信できるケータイである。まるで餅を丸めている如く、地球を掌でまるめ

て、いやまろめているんだ。ほらほら子供は花一匁の遊びでもしたまえ。花一匁にもならぬお前さんたちと呼びかけて見たくなるぞなもし。人間のタイムスケールでは無限であるが、宇宙時間では、地球もいずれ太陽に飲み込まれて失せてしまう。我々人類も花一匁のあはれをもっていると思像力を膨らませられる下五の措辞ではなからうか。

### アルデバラン目ざしし旅や春の夢

紀子

今、アルデバランを目ざしているのはパイオニア10号と命名された木星探査機である。アメリカの無人探査機である。作者は、アルデバランを目ざして飛んだ旅をしたこともあつたなあ、夢の中で、春の夢であつたかと夢の余韻に浸っている。春眠暁を覚えず床にいる。或は、プラネタリウムの席にいたのであろうか。映画館を出て明るい春光に眩しさを感じた一瞬の感慨に似通っている。  
**浅草に連合ひはぐれ養花天**

幸一

養花天は花を養う天と云う意味で、花曇の季節になっている。浅草の花曇は庶民の生活感があつて、昔から詠われている。浅草は花曇の俳枕と言つていい。そこへ、夫婦で出掛けたのだが、途中で奥さんにはぐれてしまい、散々捜したが見当たらず、あきらめて家に帰つて見ると、ちやっかり家に鎮座しておつたではないか。こらあ、と声をあげてみたけれど、胸をなでおろして幕。

### 「北回帰線」の頁春の蚊挟まれて

陽一

「北回帰線」はヘンリーミラー（二八九一〜一九八〇）の自伝的小説の題名である。陽一さんにこれを読んだ若き日々があつた。先月「されど新年」を發表された陽一さんの五十年以上前のことではないか。或は読み返してそれほど昔ではないかも知れぬが、ヘンリーミラーのその本に蚊が押し花の如くへばりついていたのである。本の題名からして「春の蚊」でなければならぬと思ひ投句された。私を含め三人の方がこれを受け取つた。

### 一句鑑賞

飯田孝三

### 波音の引くとき高く春の海

紀子

一読、渚に引き返す潮の泡立ちが見え、波音が聞こえる。ううむ、ほんとうの春の海である。波音といえば、普通、磯に打ち寄せる波、岩に碎ける波の音だが、よせては返す、その波音に紛れなき春を感じ、一瞬、四時運の不思議を思ふのである。「とき」が効き、上中力行、タ行音を畳む韻きは、春の高揚感に通い、下、「ハルノウミ」の大どかな調べは、眼前に広がる海の開放感をたぎらせる。

### 春の海足裏に砂のあたたかし

正美

砂浜をゆく足裏に春の到るを知る。「あたたかし」の外連なさがいい。つくづく春のよろこびがこぼれる。「あ

たかし」の平仮名書きも、巧まずゆき届き、妙にも足裏「に」が働く。臍である。仮に「アシウラ」と読み、省いたら「あたたかさ」は霧散、句にならない。5、9、17音目のi音頭韻が句のかなめ。

### 養花天供物ほぼる四姉妹

宏子

「供物」は神仏へのそなえもの。戦前戦後の食物の貧しかった時代、よそからの到来物は、まづ仏壇に供えてから、一家の子供らでいただいた。「ほぼる」に、ついそんな図を思ったが、はて、餓鬼たちならぬ、四人「姉妹」さんの娘さん姉妹のご登壇。確か総勢四人。お揃い百寿になんなん、末娘さんも殆ど傘寿、めでたし。なるほど生御魂の謂いもある。「養花天」が手柄、花曇では息が詰る。「三」ならぬ「四」姉妹が決まる。「三」は鼎、整い過ぎ、「四」には「四方」、「四隅」とて欠けるところなく、めでたさに輪をかける。

### 店倉<sup>たぐら</sup>のギリシヤ人形花曇

陽一

商家の倉に仕舞われた、それとも飾られている、「ギリシヤ人形」と「花曇」の取合せに驚く。紀元前幾千年を遡る西洋文明の標<sup>しるし</sup>と、花曇りは、日記紀万葉・王朝縁<sup>えん</sup>のやまとごころの機微とが、ここ店倉の一隅に見える。なんと、遙かの時空を翔け、東西の歴史・文化をまる抱えるのである。ところで、古代ギリシヤはポイオティア地方にあった、都市の一つにTanagara。そこ

の墳墓からテラコッタの着色小彫形が出土、「タナグラ人形」とよばれる。紀元前八〜一世紀に作られ原始的偶像から神像まであり、前四〜三世紀の婦人像がとくにすぐれているとか。同人形のことは、句会の席で、陽一さんに教えられて知ったのだが、つまり、耳馴れぬ「ギリシヤ人形」は「タナグラ人形」をさす。ここは「ギリシヤ」を云い、思いを歴史の宙へ駆ける。燦くエーゲ海の光と、大和しうるわし花曇りの氣息が臉に揺曳するのである。店倉とTanagara、エスプリきらりと氣宇壮大。「店倉にタナグラ人形鳥曇り」（做猫）。

### 春の海アロエの列の向う側

昭七

「春の海」に対する「アロエ」の幹旋が斬新。また、く「列」が、その先に広がる春の海のたゆたいを目に物見せ、ひびき交う海音を伝えて来る。石廊崎での作。水仙はじめ花々が咲く岬で、さすが、いち早くアロエを見てとる。視聴相伴、紛れなき「春の海」を蜿々と繰り延べるのである。一句を貫く朧々の調べは、和み合う音色と相まってげに春の海。

### 馬柵<sup>ませ</sup>一つはずれてをりぬ山桜

みち

山麓の牧場風景である。山桜の太木だろうか、幾本だろうか、連なる馬柵の一角が、花さかる撓みから外れている。桜ははなやかで、また、寂々しい、ことに山桜は。あちこちに馬がいる。馬は雄々しく、けなげだ。牧場の

ほとりに、作者は何を思うのだろう。「遠<sup>とほ</sup>に征きし馬の嘶き山桜」(三泥)。(出句一覽掲載順)

### 一句鑑賞

武者昭七

#### 掌に地球まろめて花一匁

孝三

テクノロジーの発達は目覚ましい。ケイタイはスマホに替りスマホは早くもタブレットに替るといふすまじさ。居ながらにして何処でも世界中の情報を一気に取り込み、あるいはこちらから発信するという暮らしが始まっているらしい。掲出句の中七までは車中で見かけたそういう人種の生態と聞いた。(作者の注釈なくしては理解に苦しむのは対象が読者の知識の範囲を超えているからであり俳句の出来不出来とは関係ない。)下五の「花一匁」は昔なつかしい童の遊戲。作者はあるいはスマホいじりに熱中する若者たちに童の無心の遊びを見て揶揄しているのかも。

#### 接骨木にわたしの咲く下総に長居して

陽一

にわたこの花に見惚れてつい長居を決め込んでしまった。さてそろそろ御免こうむろうか、という句と思つたらそうではなかった。(それだけでも十分美しい句だ。」「下総」に鍵が秘められていたのである。(だから俳句はおそろしい。)作者は本来関西の人。下総暮らしは長いけれどそこはつまるところやはり「異郷」なのである。下総が嫌いというのではない。それは、にわたここに注ぐ作者の温か

い眼差しに良く表れている。それでも「長居となつてしまった」という払い難い異郷意識の底に流れているものは止み難い望郷の念である。深いため息にも似たリズムにそれがこめられているのだとあとで気づいた。

#### 都忘れを忘れじと呼び北に生く

宏子

都を忘れるのはいや。だから都忘れの花をわざわざ「都忘れじ」と名を換えて呼んだというのである。都忘れは山野に自生するミヤマヨメナの園芸品種で初夏のころ紫青・白・ピンクなどの清楚な花をつける。花言葉は「別れ」だとか。可憐さと同時に野草らしいたくましさを感じられる。「北に生く」には強い決意と意志がうかがえてさわやか。ついでに万葉集からこれと反対の歌をあげておく。「わすれ草わが紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため」。忘れがたい古里だけれど忘れねばならぬときもある。だからわざと忘却を誘う忘れ草を紐につけたというのである。ひとが古里に寄せる熱い想いは同じである。

### 一句鑑賞

光 みち

#### 蝌蚪生まれ喜び水に浮び来る

高志

昨年水元公園で蝌蚪の群れを見た。黒々として、実によく動く。何かそれぞれにおしゃべりをしているように見えたが、私たちには聞こえない。喜びの声は聞こえない。



いが、浮いて来る時に感じられる。チューリップの句\*の細見綾子ばりに、蝌蚪の動きを嬉々として表したのである。

\*チューリップ喜びだけを持つてゐる

細見綾子

### 一句鑑賞(37号分)

飯田孝三

春昼の古い卓袱台辞書を積み

啓泰

しよっぱなの「春昼」がびしやり。卓袱台に積みむ辞書類と相まつて春の気だるい気配があたりに漂う。ただ「古い」に重複臭。「春昼の卓袱台文献辞書を積み」も一案。川底に日の届きをり春の水

正美

透きとおる浅春の川だろう。水の流れのひびきが聞こえてくるようだ。「日の届き」の客観がいい。「をり」がよくよく見届ける視線を感じさせる。さりげなく、印象鮮明である。

一合にたりぬ米研ぐ春の水

多美子

当世の厨風景である。昭和初期以前の大家族、戦後の団塊ファミリーの時代を経て、今やどこでも小家族いや核家族化が進む。それにつれて炊飯の分量も減る。一合ばかりの米を研ぐ手元の水がきらきら光る。これまた「春の水」の真実の姿であり、それを愛しむ心情が見てとれる。さりげなく現今の社会風俗をとりこんで深い。

河村博旨

覗き見る春の水底神田川

みち

川底に日の届きをり春の水

正美

の二句、風景がすぐ浮びます。いい句です。神田川も最近澄んできて、真鯉や緋鯉の姿も見えます。魚つりが趣味で何処に行つても川があると覗きます。ああ春だなあ、そろそろ鮒や鯉やウグイの釣れる季節だと川底の魚の姿を確認。こんなことを連想する名句でしょうか。

光成高志

大利根の水は静かに春を押し

幸一

この句の余韻に今も浸っている。「春を押し」の切れは句頭に還る止である。年々歳々水相似たり歳々年々人同じからずの感慨が起こる。静かに呟けばいい句だ。オオトネノミズハシズカニハルヲオシ。私は思う。芭蕉の鹿島詣でから、蕪村や一茶の旅を経て、近世末の赤松宗旦の利根川図志につながり、柳田國男の遠野物語に至り、やがて民俗学に結実する現在を。それがこの句の懐である。味わいである。そう読めるところである。名句はかくして誕生した。

呪いで傷に泣かぬ子夏休

たか子

丈低き故に好まれ草の花

〃

あけぼのや紫蘇の香たちて筑波山

孝三

あめんぼや水の弾力地球若し

〃

秋日傘佃煮屋にて閉じにけり

敏子

手渡して貰ふ南瓜の重さかな

〃

トライアスロンランのコースに秋燕

高志

法師蟬鳴き止め姿勢正したり

〃

コスモスは根強き故に風が好き

〃

## はがき句報三十九号管見

飯田孝三

秋日傘佃煮屋にて閉じにけり

敏子

秋日傘と佃煮屋の取合わせが、ウーム……えも言えぬ。

「閉じにけり」がうまい。絶妙の呼吸である。口唱が、

又、いい。アキヒガサツクダニヤニテトジニケリ。ア・

イ母音の踏韻は爽涼よどみなく、結五のイ三音に、しみ

じみ、秋を肌身にする。(普通なら出ばる)「にて」がさら

りと抜け、情感を深める。「佃煮屋」に潜む諧謔が面白い。  
法師蟬鳴き止め姿勢正したり

高志

法師蟬は蝟とともに秋の蟬。尤も、その他の残る蟬も  
秋の蟬だが。意味上、「く鳴き止め」で切れる。「正した

り」が厳だ。正眼に蟬を捉え、目を凝らす。そこに何を

見るかは、読み手それぞれの詩眼しだい。ゆつたりと入

り、たたみかけ、じつくり、しつかりと収める、オ、イ

母音の繰り返しは句意に添い、結「たり」の思いは深い。

勿論、中七下五の頭韻アの踏韻も利いている。ふと、十

七音の真中「め」の働きに気がつく。句に膨らみを齎し、

深かつ大にするのだ。仮に「み」だったら、報告を出ず、

間違はなく、瘦せる。「天狼」正格の一句である。

手渡して貰ふ南瓜の重さかな

敏子

そうそう、分かる。手渡して貰った時の重さの実感。

それが、又、南瓜とあれば、言うことなし。巧まず、抜

けて、めでたい。く「かな」が嬉しい。俳諧の詩。

トライアスロンランのコースに秋燕

高志

秋燕には、帰燕の高さと、ときに橋梁を掠める疾さを見

る。「ラン」はマラソンのパートだろうか。人の競技と

燕の飛翔のうしろに、天と地の、人間と自然の悠久の営

みを見る思いがする。

コスモスは根強き故に風が好き

高志

「風が好き」がいい。擬人詠の成功。まざまざと見え

る、コスモスの群生が風に煽られるさまが。きつと、細かい毛状の根がいつばい生え、しつかり地中を掴んでいるのだ。中七「根強き故」の漢字書きが練達。ことに、「故」は周到な用字である。理はすつきり抜け、コスモスの正体を目に見せる。上五中七、屈折する音調が句意に添い、下五の解放感を膨らませる。「くきくにくき」が氣韻を引きたてる。

(平成 20・9・09)

### 棍棒の如く玉巻く芭蕉かな

敏子

玉巻いて、棍棒と成す。その圧倒的な質量感に驚く。虚子翁も唸っているだろう。「かな」は芭蕉の正体に触れた実感だ。凡句の安手の「かな」とは違う。なるほど、「かな」は能面のはたらきをする。切字の本命は「かな」と知る。ほのぼのと俳諧が漂うのも嬉しい。

Ko nBo ONoGoToKuTaMaMaKubasi O KaNa. O、

Aを連ねる、力強く、悠々の調べが芭蕉の樹勢を彷彿させ、屈折の韻き(中七)に、玉巻くさまが克明である。K、T音が要所ではたらく。他の入選十一句は、芭蕉を梃にした情趣を出ず飽き足らない。樺氏の句はいいが、氏の特選と妄選は一致しない。(平成(20・9・11))

### あけぼのや紫蘇の香たちて筑波山

孝三

夜がほのぼのと明け初めるころ、紫蘇の香りがたつていく向うには、紫の筑波山が立っている。「春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて」と誰かさんは

言うけれど、「夏は夜。」ならで、紫蘇匂う「ゆきは申さずむらさきのつくば」であるよ。「やまとたけの尊の言葉をつたえて、連歌する人のはじめにも名付けた」る山だもの。俳諧は連歌からでき、その道を歩まん吾は。

(平 26・4・4 高志)

### お便り広場(到着順、敬称略)

拝復 白金蔭第37号拝受。いつもながらのご高配に感謝。「覗き見る春の水底神田川(みち)」と「川底に日の届きをり春の水(正美)」の二句、風景がすぐ浮びます。いい句です。神田川も最近澄んできて、真鯉や緋鯉の姿も見えます。魚つりが趣味で何処にいても川があると覗きます。ああ春だなあ、そろそろ鮒や鯉やウグイの釣れる季節だと川底の魚の姿を確認。こんなことを連想する名句でしょうか。ご健康と皆様のご健筆を祈ります。

敬白(3・30 河村博宣)

前略 「大利根」の句の鑑賞に感動しています。自分の句を忘れて、繰返し読みました。たかしさんの生活体験を通しての「利根川図志」の読みの深さも伝わってきます。じつはこの句木曜句会では誰の眼にも触れられず、でも自分としては愛着があつて捨てられず「白金蔭」に投じてみる気になりました。孝三さん、昭七さんからも眼にとめてもらって、自信を回復しました。俳句作って

いて生きてよかった、と思うのはまれに訪れるこうした瞬間です。ありがたいことです。

つい先日「屋根」にのせた昔の\*綴方のコピーを引繰り返していたら、こんな一枚も出て来て感慨久しゅうしました。これを書いた当時、この前半の部分を「屋根」を去られた人たちに読んでもらえたらなア、という思いがあったことはたしかでした。こうして私の今生の終わりに近くにはたかし、みち御二人と再び相まみえる御縁が生じたのも、目に見えぬ俳句の神さまの導きによるのでしよう。もしこの感慨を共有出来ればと思いつつ、ふと同封してみる気になった次第です。気軽に読み捨ていただければ幸いです。では又お会いしましょう。先ずはお礼まで、忽々。

たかし様

2014・3・30

幸一

(3・31 松村幸一)

\*『走り梅雨』松村幸一』として2ページの屋根への投稿エッセイ。前半に千葉の会の吟行句会に当って下見をしていたが、やはり当日句の鮮度にはかなわないので、リアルタイムの句を投句していること、次にこの五年間に数人の仲間がやめて行ってしまったのは恋人に裏切られたみたいなショックだったが、いつの日かどこかで出会うことがあれば心から握手して、この小さいけれど深い文芸の道との係わり方などを互いに語りあいたいと書かれてある。

(以上の手紙には、すぐさま礼状をだしました。又、屋根退会手紙も

同封しました。屋根を止めてから八年がたち、今幸一さんと又出合ったのです。至誠を貫けばこういう邂逅の再び起こること、まことに人生は面白い。文芸を好み信じて楽しまんと思う。)

白金霞三月号ありがたく頂きました。その充実振りに驚いています。そして我孫子日記、全く御多忙のやうで感心しています。三人の老人の会、一人は本、雑誌全て整理して全くなにもない状態です。私も似たようなものですが。日記中の俳句またすばらしいですね。皆様の益々の御活躍を祈ります。なんとか元気でいます。

(4・1 小山陽也)

俳誌ちようだいしました。ランドセルの句―春の夢とは納得です。一年間は続けてみたいと思っていますのでよろしくお願いします。(犬猫なしで暮らしたことのない私共、この春は何につけてもボンヤリです。)

家計簿に飼育費ゼロか花の道 (4/2 工藤宏子)

よろしくお願い致します。お手数をお掛け致します。

(H26・4・15 青木啓泰)

暖かい日が続くようになりました。申し訳ありませんが今月も休ませて下さい。会費同封しました。古代は別便です。五月三日はできるだけ参加したいと思っています。たまにはお目にかかってシゲキを与えて頂きたいと考えました。1700過ぎ何人かで(孝三先生、光成さんご夫妻±三々四人)でよければ梅の花で如何でしょうか。私の

カードでなんとかかなりそうです。毎日のんびりしています。Mさんとは二十二日に会う予定です。皆様のますますの御活躍を祈ります。五月五日は老人三人の会です。

(4・14 小山陽也)

御無さたをお許し下さい。「白金葎」の吟行句会のご案内拝受、ありがとうございます。参加します。貴兄のやさしさ一刻も忘れることはありません。天狼の残党と言われようが、これが「天狼俳句」だという作品を作りつつけるしかありません、ですよね!!上野の「練堀町」は、小生が住込みで働いたところですよ!!ではその日まで。

(4・18 佐藤宏之助)

コビアンの懇談今回も大変楽しいひと時でした。句会の席とはまた違った発見があるので面白く思います。今後もぜひ続けて下さい。38号原稿一句鑑賞同封しました。よろしく。

(4・20 武者昭七)

先日の四月例会ではお世話になりました。楽しい半日でした。右のとおり駄文(一句鑑賞)をお送りします。花終り夏もまだかく、ご健吟を祈ります。

光成高志さま

(平 26・04・20 飯田孝三)

### 受贈誌(四月号)

佐保姫の匂ひ袋ぞ幣辛夷(彩116号)

平野ひろし

さくら咲く松千本に咲くはよし(〃)

〃

鬼やらひ済んでフェリーの出航す(あすか4月号) 山尾かづひろ  
寒明くる鳥の声のよく通り(野火四月号) 池田啓三  
大涌谷石焼諸と黒卵(〃) 大谷のり子  
雪晴や池の真鯉も浮いて出て(〃) 小澤房子

### こだま(俳誌交換主宰選句)

彩五月号(116号) 平野ひろし主宰抽出  
初写真何回撮って真面なる(35号) 光成高志  
春の日を返す田中の水たまり(36号) 〃

### 俳窓評論纂

薄氷の下を流るる水のあり(04/1/24 屋根千葉)  
薄氷に触れて流るる水の色(〃 未投句) 〃  
薄氷に支え流るる水のあり(04/2/7 投句)  
薄氷につかえて変わる水の色(同月末高野ムツオ添削)  
薄氷に水悶えたり離れたり(14/2/10 萱入選)  
右は私の薄氷の句の推敲過程を示す。高野ムツオさんの添削に当時脱帽した記憶あり、今もそう思う。それで、ここに載せた。

### 芭蕉のかるみ以後(33)

光成高志

富士山をすぐ近くで見上げる吉原宿を通る時は、  
雲を根に富士は杉なりの茂りかな

桃青

という句を作った。鉾杉の形に富士が雲を根方にして聳えているという奇抜というより面白い比喩である。

富士の山蚤が茶臼の覆かな

桃青

「蚤が茶臼をせたら負うて、背負うて富士のお山をちよいと越えた」という童謡をふまえた句である。この「蚤が茶臼を負う」というのは、分不相応なほどの夢や希望をもつことの表現として使われる。右の童謡は、農民の子が天下を治めたその頃の風言であらうと「和漢文操」にある。ここでは、富士山の形を云うのに使われている。

富士山の山の姿を見ると、蚤が茶臼を背負ったというより、むしろ茶臼を上から覆い被せたような姿であるというのである。これを深読みすると、富士山を眺めていたら、俳諧で天下を治めるなんてとてもできない相談で、恥ずかしくてその蚤の茶臼に覆いを被せて見えなくしてしまいたい。西行の富士の煙の行方も知れぬ歌にも雪舟の絵にも載っていない蚤の云うことを聞いてみな。人の垢を食って生きて人に捻り潰される我は、化生になって塵の積もった山姥のふところにも遊べるのだ。若き桃青の心に忸怩たるものが積もってきたのではなからうか。さらに、東海道を行き、また歌枕の小夜の中山にかかる。命なりわづかの笠の下涼み

桃青

西行の「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の歌が下敷きになった句である。炎天下の

小夜の中山を越えようと来たが、木陰が少ないので、木の下の下涼みではなく、笠の下だけの僅かな蔭を命と頼んで、涼んでいることだというのである。「命なり」と唐突にはじめに出したところ、談林風というより、先の西行の歌からいじけた心持がでているのではないかと思う。さらに行くくと、御油と赤坂の宿駅に至り

夏の月御油より出でて赤坂や

桃青

夏の月が出たかと思うと、すぐ入ってしまう。その短いことは御油と赤坂の間の短いのと同じだなあという感動が入った句である。二十年経った後でも、ほのめかす句としてこの句をあげているので、芭蕉が気に入った句であつた。御油に着いた時は、丁度月のよい晩であつた。次の宿までは僅か十六町なので、夕月夜に興じて足を伸ばし、赤坂まで行つて宿をかりた。お大尽などは、御油に泊つて一夜を楽しんだ後、たつた十六町行つた赤坂でもまた女遊びをするのだらうと、当世風物を裏に持っているから面白いのだらう。どうも、桃青は、「貝おほひ」の世界やまた遊蕩気分の横溢とした時代をどうかして抜けなければと考えていたような節がある。

旅のうたを読む

IV

——かそけ墓——

武者昭七

人も馬も道ゆきつかれ死ににけり。旅寝かさなるほどのかそけさ

折口信夫

作者は柳田國男と並ぶ著名な民族学者。民族探訪のために国内をあまねく歩いた。右の歌は大正九年信州遠州の山間を廻った際(三十四歳)の体験をもとに「供養塔」(全5首)と題して「日光」に発表。のち第一歌集「海やまのあひだ」に収録された。折口の代表作として広く知られている。詞書に次のようにいう。「数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音の立つてゐるのは、あはれである。又殆、峠ごとに、旅死にの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人などもある。」

このうた三句切れの典型的なうた。上三句は草茂る路傍に見出した情景。馬頭観音は馬の後世を願って建てられた供養塔だけれどそれが死者の供養塔とともに並んで立つところに人馬一体の街道暮らしに加えて村人の心の豊かさ広さが滲んでいる。道に死ぬのは馬だけではない、人もまた道に死するものである以上生き物としての「かなしさ、あはれさ」は同じであり差別は無用なのである。結句「けり」に深い悲しみと詠嘆が籠る。

下二句。「旅寝」は家を離れて旅の宿で夜を過ごすこと。一夜だけの宿りではない、幾夜も旅寝が続くのである。「かそけさ」は「光・色・音などが消えかかるさま、かすかであるさま」(岩波古語辞典)。旅寝を重ねていくほどに人のいのちの息も馬のいのちの灯もともにかすかに

細っていく、という意味であろう。

「旅寝かさなるほど」であって「かさぬるほど」でないことに注意するのは山本健吉である。「かさぬる」では主体は自分となるが「かさなる」としたときは過ぎ去った月日が主体となり、その過ぎていく月日がかすかなものとなる。その歳月はさらに街道を行き来した人馬の死の旅の昔にまでつながっていく、と説く。卓見であろう。かつて鬼怒川沿いに会津西街道を歩いた時、僕も同様の場面に出会った。もうそれは草深い墓ではなく立派な舗装道路の片隅であつた。(2013・12・20)

我孫子日記

3/21例会。3/22\*利根町、徳満寺。4/1病院、\*2今井の桜。4/5<sup>3</sup>\*小林牧場。4/7<sup>3</sup>8<sup>4</sup>\*南伊豆。4/11<sup>5</sup>\*武蔵蔵小金井。4/16 S O A。4/18例会。

\*寺山の無患子の種拾ひたる

間引き絵馬の色褪せてをり花の寺 高志

2\*枝伸べて水の上なる桜哉 高志

小波の桜色なる桜土手 高志

\*3ノエ節聞こえて来たり花筵 高志

赤ん坊を取り替えて抱く花筵 高志

\*4 花曇海より離れ電車行く

高志

引く波寄する波のぶつかる春の海  
春の浜突つ立つものを引いてみる  
薄日射す伊豆の山道蠅生まれ

中に立つ鹽岬の春の海

みち

\*5 三井家の一輪挿しに八重桜

駒繫数珠掛桜共に咲く

古き家のピアノに薄き春埃

櫂の芽かなたに破風の子宝湯

高志

恵子

敬司

## 編集後記

韓国の旅客船沈没事故がまだ終息しない。船長が真つ先に脱出したとか。大統領がこれを批判、家族らの泣き叫ぶ様を見ていて、日本人と違うと思った。私の修学旅行で乗った紫雲丸が翌年霧中の衝突事故で沈没した。JALのジャンボ機が御巢鷹山に墜落した日に私は太平洋の機中に居た。二つとも、一年一日の違いで免れた。幸運としか云ようがない。先の大震災も、この白金葎の創刊一週間前に起こった。昭和二十年空襲の記憶といい、記憶を払いきれない災害をこうむるのが我々日本人の宿命である。それで心が鍛えられたのだと思う。学問もそうである。外国の学問に押し寄せられて、それに抗して

いかなければならないのが日本の宿命である。漢文だけで話し言葉を書かねばならなかった古人の苦勞が思いやられる。大和ことは女子供のものだという偏見は一掃されたけれど、物理学の最先端技術を取り入れたばかりに、その事故の終息に何十年も取り組まねばならなくなっている。又、若い研究員の論文捏造問題でマスコミを騒がせるような日本になってしまった。  
今月の孝三さんの「地球まろめて花一匁」を膨らませていたこんな後記になってしまいました。  
五月三日、芸大にくる法隆寺の仏像は「大震災復興記念の祈りとかたち」というサブテーマが付いている。どうかお出でになり一緒に聖徳太子の立像などを拝観して祈りましょう。

白金葎 第38号 平成26年4月発行

編集・発行人 光成高志 (TEL & FAX 04・7187・1068)

発行所 T270・119 我孫子市南新木2―14―17

表紙の題字…加納綾女。写真は白金葎